

俎上の「日本学」

——ハルトゥーニアン著「History's Disquiet」とそれにおける今和次郎について——

アンニャ・ホップ

はじめに

この研究ノートは2001年度のジャパノロジー研究会で報告した《「日本学」とは何か?—H. Harootunian氏が引き起こした「日本学」の再検討について》¹⁾に基づくものである。

ジャパノロジー研究会²⁾が2001年度に特に注目したテーマの一つが海外における「日本学」に関する「方法論」と「理論」という問題であった。この背景には、「国」を基盤にしている「日本学」は独自の方法を持たず、他の学問の方法に依拠しがちであるという学問への疑いがある。この問題意識から、ジャパノロジー研究会の中で、ハルトゥーニアン著「History's Disquiet — Modernity, Cultural Practice, and the Question of Everyday Life」³⁾を取り上げることにした。ハルトゥーニアンは第1章で「ジャパニーズ・スタディーズ（日本学）」ともそれに属している北米のについて政治・社会・歴史的背景とその現状を徹底的に分析し、ジャパニーズ・スタディーズでは西洋中心的イデオロギーが学問の根本にいまだに働いていることを批判している。それらの問題を超越するためにハルトゥーニアンが新たな比較概念として「日常」(everyday)、「日常性」(everydayness)⁴⁾、「日常生活」(everyday life)を提示している⁵⁾。

筆者がこの文献について考察する動機にはジャパノロジー研究会とは別にもう一つの理由がある。これはハルトゥーニアンが主に第3章において今和次郎(1888-1973)を論じていることである。筆者の修士論文のテーマ⁶⁾である今和次郎は20~30年代にかけて「考現学」と称して、1923年の関東大震災から東京の復活過程の中に現われている日常生活の様々な姿を中心に幅広い観察、調査と記録を遺して

いる。ハルトゥーニアンが今和次郎の「日常生活」についての考察をどう解釈しているかということが個人的な研究にとっては興味深い⁷⁾。

本稿では先ずハルトゥーニアン著「History's Disquiet」の主な構成と内容を紹介してから、特に北米におけるジャパニーズ・スタディーズに対する批判とそこで提示している「日常性」という概念に触れたい。それにジャパノロジー研究会の報告の際に、展開された議論の結果も取り入れながら、具体的にこの「日常性」を「日本学」に適用することの可能性について述べる。最後にハルトゥーニアンの今和次郎解釈について幾つかの問題点を挙げたい。

筆者が受けたドイツの「日本学」の大学教育では「理論」はカリキュラムにほとんど含めていないので、筆者には「理論」についての知識が十分とは言えない。「日本学」という限られた観点について、マルクス主義的歴史観から主として欧米の資本主義がもたらした「近代」と「日常性」を思想的に扱っているこのハルトゥーニアンの「History's Disquiet」を学問的に位置付けることは筆者にとって不可能であり、専門家に任せたい。しかし、この文献における「日本学」と今和次郎の「考現学」の捉え方に関しては幾つかの私見を述べることができる。こうした事情から、本稿は論文でも、書評でもなく、あくまでも断片的な「研究ノート」という形を取ることにした。

(1) 「歴史の不静止」(History's Dipquiet)

「History's Disquiet」は1997年の5月にカリフォルニア大学(University of California, Irvine)のクリティカル・シオリー研究所(The Critical Theory

Institute) のウェレック・ライブラリー・レクチャーズ (The Wellek Library Lectures)⁶³ として行なわれた講演を本にまとめたものである。このコンテキストからいえば「日本」に焦点を合わせるよりも「クリティカル理論」を中心に取り上げていることは当然であるかも知れない。

4章からなるこの「History's Disquiet」⁹⁷には序文はあるが、結論という章がない。目次があっても、サブタイトルはこの目次には表示せず、文献は注釈に書き込まれており、文献リストが加えられていない。その代わりに詳しい索引があり、これは使いやすいくところである。文章自体も年号、詳細な引用などはほとんど表示せず、論文というよりもエッセイ的で流動的な文章という特徴があると言える。しかし、内容は「近代」における「日常」についての思想に基づいた非常に密度の高い理論的論証からなっており、決して分かりやすいとは言えない。

序文で著者がこの本で目指している意図が挙げられている。それは「日常性」という概念が時間的な経験の最小単位として、「近代」がもたらした日常生活に起きた生活変化とその意義を思想的にどう受容できるのかということである。それはこの「日常性」が、世界中で共通経験として捉えられる「近代」という過程を論じる歴史的な観点の拡大に如何に使用できるかということである。欧米における「近代」という経験は欧米以外に位置している社会・文化圏・地域における「近代」の経験を今も圧倒されていること（欧米の近代が本物で欧米以外の近代はそのコピー）を述べ、こういう前提は欧米の諸学問において欧米中心主義的な優位性を保つことにもつながるといふ。欧米の学問にある根本的なこういう視座の問題が欧米以外にある社会を外部のままに、距離のある処に置かせている。そういう欧米以外における欧米外の地域を研究対象にしている学問の根本的な観点を拡大し、弱点を克服するためには「日常性」という概念を導入すれば、この問題の解決につながることができる（“With the identification of everydayness, there is no longer an outside.”¹⁰⁰）。この「日常性」をもっと具体的にカルチュラル・スタディーズとアジア・スタディーズに適応可能にするために以下のように説明している：

“...how everydayness might more effectively serve as a candidate for a cultural studies capable of dissolving the presumption of a visible inside and repressed outside.”¹¹³

序文によると、第1章で組織的な枠組みの中で、エリア・スタディーズでは欧米は「外部」を「外部」のまま固定していることを明確にしている。第2章は20世紀初頭、欧米の思想家たち（そのほとんどはワイマル時代のドイツ出身であるが¹²⁰）は「日常」についてどう概念化したかということ考察し、第3章は当時、欧米と類似的な構造のある日本の「近代」について違う形で現われているが、「日常」を考察している日本の思想家たち¹³¹に注目している。それは欧米の「近代」の反映でもあり、模倣でもあり、それへの対抗でもあると述べている¹⁴¹。

ハルトゥーニアンを試みは20世紀初頭に資本主義がもたらした「近代」における「日常性」に現われる様々な生活変化を考察している当時の欧米の思想家を、当時の日本の思想家と平等にグローバルな知的コンテキストの中で解釈し、分析することが、「日本学」の限られた視点の拡大よりも、むしろ新たなアプローチとして、「国」にこだわらずにおれないというジレンマから脱却する道の提示として考えられる。この意味で“...History's Disquiet will remain the definitive as well as pioneering work on the subject.”という評価¹⁵¹は誰にも異論はないだろう。

その「日本学」を超える多角的あるいは両義的な著者の観点はタイトルで強調されている。「日本」という言葉はタイトルには挙げられず、「日本」について論じていることは一見して分かるようにはなっていない（図1）。しかし本のカバーを見ると「日本」の「近代」や「日常生活」に関係していることが明白になる。遊園地とか祭りのような盛り場に白黒で写っている大勢の日本人たちの写真を背景に杉浦非水作の上野浅草間の日本での初めての地下鉄開通のプラカードが載せられている（図2）¹⁶¹。

このタイトルとカバーのデザインのギャップから「日本学」という学問に対する距離感だけではなく、「日本学」の観点を超越する広い視座の方向性が推測される。取り外せるこのカバーと、タイトルにおけ

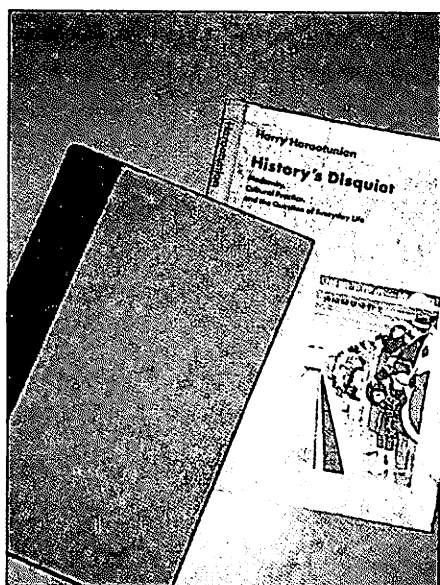


図 1

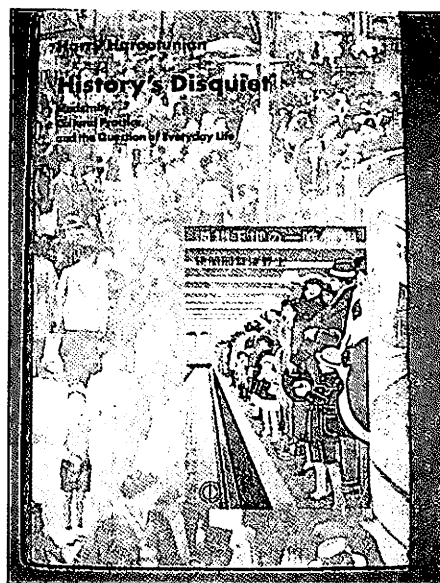


図 2 カバー

る「日本」の不在は、「日本」だけに集中することだけではなく、グローバルな「コンテクスト」へ、要するに西洋・東洋の対立関係の廃止というハルトゥーニアンの要請を鋭く象徴している。本人の言葉で言うと：

“Although I have concentrated on Japan as an example of how the repressed outside of Euro-America underwent the passage of capitalist modernization to produce its own experience of everydayness [...], I am persuaded that any society being transformed by modernity would serve as well.”¹⁷⁾

となる。しかし、一方では「日本」はいつでもいいような、欧米が起こした資本主義がもたらした「近代」の中心的観点は（否定的でありながら）、あくまでも欧米に集中しているという印象が否めない。序文と第1章を別として、第2章に西洋思想家、第3章に日本の思想家という構成自体が、本当に批評するつもりで西洋対東洋という対立関係の存在をうかがわせるものではないだろうか？

(2) 「ジュラシック・パークに棲息している恐竜」 としての「日本学」

この第1章で論じられているエリア・スタディーズへの批判は三つの部分に分けることができる：

1) 北米におけるエリア・スタディーズの現状への批判 (25-29頁), 2) その学問の戦後の冷戦イデオロギーの元にある政治的な学問史・立場の分析とその批判 (29-45頁), 3) エリア・スタディーズに代わる他の学問及び理論の適応の検討 (46-58頁)。検討されているのはさらに三つ、カルチュラル・スタディーズ (46-47頁)、ポスト・コロニアル論 (47-52頁) とハルトゥーニアンが提示している「日常性」という概念 (47-52頁) である。

アジア諸国の社会・文化圏を研究対象にしているU.S.A.におけるアジア・スタディーズは、学問として西洋からみた地理的な空想の地域「アジア」について考察しているが (25頁)、それぞれアジアの「国家」(nation state) を基盤にしている限り (26頁)、アジアという地域を欧米以外のままで保ち続けている。こういう西洋 (= 現代的, 優越的) 対東洋 (= 伝統的, 劣等的) という対立関係 (27頁) という実状の背景には冷戦に基づく政治的な利害が研究の動機として働いている (26頁) ことを述べている。しかし、これに対して「アジア」が現実になった形として実際に存在しているASEAN, APECなどの組織をどう理解すればよいのかについては述べていない。

その上で研究組織はその在り方を反省しないまま、新しい理論を取り入れないで、そのかわりに莫大なデータの収集だけで自己正当化していると述べ

ている(28頁)。従って他の学問から孤立した立場に置かれたまま、理論的に時代遅れの研究に励んでいる。その意味でエリア・スタディーズというのは思想的な「ジュラシック・パーク」の見せものにされた「恐竜」のような生き物に例えられている(29頁)。

続いて、具体的なエリア・スタディーズの研究プログラムの背景にいるU.S.A.政府のスポンサー役及び、50・60・70年代にエリア・スタディーズに適用された西洋中心主義な理論¹⁹⁾を分析してから、西洋人にとって勉強しにくいアジアの言語獲得やフィールドスタディーズである留学が理論の代替物として解釈されている(39頁)。それに対してはTom Havensも述べているように、日本への留学や日本語の言語獲得は「日本」を研究対象にするために不可欠であることは誰も否足できないだろう。ハルトゥーニアンの研究にも協力しているU.S.A.政府によるエリア・スタディーズ・プログラムに対する政治的な意見については本人は触れていない²⁰⁾。

結論として、世界中共通の「近代」の経験で国境を超える概念である「日常性」という大きな意味合いは西洋対東洋という対立関係では捉えることができず(41頁)、資金集めに務めているエリア・スタディーズの研究は「お雇い研究」(contract research)ということであり、西洋中心主義的な研究態度と反理論的態度を乗り越えるよりも固定している(44頁)。しかし、ここでは80・90年代にかけてすでに特に日本における「近代」、「日常生活」、「大衆文化」についてしっかりとした理論意識をもった幾つかの調査が出版されているのにこの文献では取り上げていない²⁰⁾。

ハルトゥーニアンはエリア・スタディーズに替わるものとしてカルチュラル・スタディーズに言及し、カルチュラル・スタディーズが異地域での異文化アイデンティティを認識していることで、知的生産が政治的な行為であるという認識していることも肯定的に評価している。(45/46頁)。しかし表面的な研究内容やマイクロ文化に焦点を合わせがちであるために、時にグローバル化のチアリーダー的存在でもあるカルチュラル・スタディーズはエリア・スタディーズの代理役に成りえないとしている(47頁)。

他方、ポスト・コロニアル論は侵略者対被侵略者、中心対侵略地などの、要するに「内」対「外」についてなどの考察でエリア・スタディーズに替わるものとし好意的に捉えられている。しかし、反コロニアリズムの国家主義の危険性や歴史性の不足等という理由でそれを批判し、ポスト・コロニアル論にさらに歴史を加えれば、使用できるという結論が出されている(47-51頁)。

最後に提示されている「日常性」という「概念」は資本主義的「近代」がもたらした「日常性」の経験はグローバルな経験であるから、西洋対東洋という対立関係という「概念」が必要ではなくなっている。したがって、「国」を基盤としている研究の必要性もなくなり、これによる西洋中心の「知識の分裂」も克服できるという結論である(55-57頁)。しかし、ここで「西」から「東」への視線を解剖し、西洋対東洋の対立関係の解消に務めているハルトゥーニアン自身の視線の起点も、彼なりの「日常性」自体もほとんど明確にしていけないので、またしても西洋優位主義の疑問が残る。

「日本学者」の観点から見ると、こういう論証について三つの問題点が浮かんでくる。まず、たとえ「日本文化」における「近代」を把握するために「日常性」という概念が有効であるとしても、「日常性」の物質的な現われである資料や行為の研究の際、如何なる方法で適応できるのか例を一つも述べていない。

さらに、そのために、「History's Disquiet」が提示する「日常性」についての思想を専門にしていけない研究者にとっては、この理論を具体的に研究に適用することは極めて困難である。「理論」を把握している限られた知識人にしか通用しないようなことになってしまい、次第に新しい「内」対「外」の対立関係が生じて、新たな「知識分裂」が固定されていく。したがって、エリア・スタディーズのために考察しているはずであるこの「History's Disquiet」で提示されている「日常性」は逆効果として、観点の拡大より、その縮小につながる。

この「日常性」を巡る文献はエリア・スタディーズの観点を拡大するために書かれているのではな

く、学問論争のために書かれたという解釈も考えられる。その中で「日本」の「近代」における「日常性」について考察している思想家たちは知識的に侵略され、自分の理論を裏づけるために、勝手に使用されているように見える。英語という言語選択やかなり難解な文章で書いてある「History's Disquiet」の中で批判されているはずの西洋優位主義の視座はこの意味でさらに強調されているのではないかという印象が残る。

(2) ハルトゥーニアンが見落とした点

今和次郎の「考現学」については、いくつかの解釈がすでに存在しているが²⁴⁾、今まで著者が知っているかぎり、「近代」における「日常性」を考察している欧米と日本の思想家たちの比較、解釈および世界思想史への位置付けはハルトゥーニアンの「History's Disquiet」及び「Overcome by Modernity」という調査が初めてである。そもそも、これまでの今和次郎についての文献では、今和次郎が20年代から30年代にかけて行なった「考現学」を「思想的」「哲学的」的に捉えたのは始めてであろう。この意味では「History's Disquiet」は無論、先進的な大きな意味を持っている。

しかし、今の「考現学」に関する「肩書」はハルトゥーニアンによると「都市研究者」(urban researcher) (79頁)あるいは「作家と理論家」(writers and thinkers) (124頁)等とされる。今和次郎の研究活動は、今和次郎集の9巻²⁵⁾からも分かるように、民家研究、住居論、生活学、家政学、服装史及び服装研究と造形論などで、「日常生活」だけではなく、日常生活、建築と美術との関係についても幅広い研究を生涯でわたって行っている。

ハルトゥーニアンの思想的な今解釈に、さらに一つの観点を加えたい。それは今と当時の建築・美術界との関連である。

ハルトゥーニアンは今が考現学的な記録にドローイングという手段を選択して、現状の記録のためにもっと適切で、正確であるはずの当時の新しいテクノロジーであった写真を選ばなかったことについて、これを「近代」に対する今の両義的態度として

解釈している(132頁)。しかし、1912年に東京美術学校図按科を卒業している今にとっては、記録手段として選んだドローイングが一番身近な手段であっただけではなく、見る物を全体でカメラのレンズを通さず、自分の眼で確認し、記録するための意図的な選択であったという捉え方もある。今の「考現学」の記録活動の最大の協力者であった吉田謙吉(1897-1982)も1922年に東京美術図按科を卒業してから舞台装飾者などとして活動しているアーティストであった。「考現学」の活動開始直前、関東大震災の直後創立した「バラック装飾社」のメンバーのほとんども当時のアーティストたちであった²⁶⁾。黒石いずみが詳しく解明しているように、今の「考現学」の記録に選んだドローイングという手段は記録対象の構造を見抜いた上で記録できるからでもある²⁶⁾。黒石は考現学の活動を以下のように解釈している：

「…人間と物との多様な関係でもある日常生活のメカニズムを分析し、そこから芸術がいかんして生まれてくるかを研究しようとしたのである」²⁶⁾。

当時の美術、工芸、建築と「日常性」との関連について今の美術的観点は「History's Disquiet」の中ではほとんど論じられていない。今和次郎の研究活動を建築史の観点から日本の建築学の中で再検討し、新たな位置付けをしている黒石は今和次郎自身のメモからなる「日常生活の器としての建築」を今の建築論として絞り込んでいる²⁶⁾。「近代」が日本で展開している10・20・30年代の「考現学」の中だけでなく、今和次郎の美術観と「日常性」のからみ合い及び位置付けはまた、これからの研究課題として置いておきたい。赤瀬川原平らの「路上観察学」²⁷⁾や小林文二の考現学で現実化したように、この「考現学」活動自体が「アート」だったということについての考察に、それに当時の欧米に、当時に「近代」がもたらした「日常性」をアートの中にモチーフとした欧米の美術家たちに焦点をあわせることで新たな観点が加えられるかもしれない。

注

- 1) 2001年6月22日開催。
- 2) ジャパノロジー研究会の研究内容及び活動についてはこの特集に掲載されている「ジャパノロジー研究会特集：序文」, 99頁を参照。
- 3) Harootunian, Harry, *History's Disquiet: Modernity, Cultural Practice, and the Question of Everyday Life*, Columbia University Press, New York, 2000. (以下にHDと略す。)
- ハルトゥーニアン氏(1929生), 歴史学教授, ニューヨーク大学東洋学部長, 日本の前近代・近代史及び思想・歴史論を研究。
- 4) 「日常性」という概念はマルクス主義の哲学者戸坂潤(1900-1945)が「近代」について使用している概念であるようであるが, それに関する思想的論証はHD, 142頁を参照。
- 5) この限られたスペースでは「近代」「国」「日常性」などの概念の定義に触れることができない。これについては別な調査が必要である。
- 6) Der Mann auf der Ginza: Kon Wajiros "Aufzeichnungen zum Lebensstil auf der Ginza in Tokyo" im Mai 1925. (『銀座の男: 今和次郎の5月1925年の「東京銀座街風俗記録」』。ハイデルベルク大学日本学部修士論文として1995年6月に提出。
- 7) ハルトゥーニアンには第一次世界大戦から第二次世界大戦終戦までの日本の「近代」(modernity)について考察している日本の思想家たちについて執筆したもう一つの大がかりな調査がある:
- Harootunian, Harry, *Overcome by modernity. History, Culture, and Community in Interwar Japan*. Princeton University Press, Princeton, 2000. この中でも今和次郎が幅広く取り上げられている。この限られたスペースの研究ノートでは十分に触れることができないので, 課題としてこれからの研究にしておきたい。「History's Disquiet」はその調査の予備的研究としての解釈も考えられる。
- この文献についての「日本学」での位置付けは例えば以下の書評を参照:
- Andrew, Barshay, "Review: *Overcome by Modernity: History, Culture and Community in Interwar Japan*", in: *Journal of Japanese Studies*, Vol. 28, No. 1, 2002, 146-151頁。
- 8) クリティカル・理論家を紹介しているThe Welleck Library Lecturesについて及び, その講義の出版シリーズであるWelleck Library Lecture Seriesの詳細は<http://www.humanities.uci.edu/critical/index.html>中の「Projects + Events」と「Publications」のサブサイトを参照。
- 9) Introduction: The Unavoidable "Actuality" of Everyday Life (1-23頁), 1. Tracking the Dinosaur: Area Studies in a Time of "Globalism" (25-58頁), 2. The "Mystery of the Everyday": Everydayness in History (57-110頁), 3. "Dialectical Optics": History in Everydayness (p.111-158頁)。
- 10) HD 4/5頁。
- 11) HD, 22頁。
- 12) Walter Benjamin (1892-1940), Siegfried Kracauer (1889-1966), Georg Simmel (1858-1918)等。
- 13) 今和次郎(1888-1973), 戸坂潤(1900-1945), 青野季吉(1890-1961), 権田保之助(1887-1951), 平林初之輔(1887-1951)等。
- 14) HD, 22頁。
- 15) Koschmann, Victor J, "Review: History's Disquiet: Modernity, Cultural Practice, and the Question of Everyday Life.", in: *The Journal of Asian Studies*, Vol. 60, No. 4, 2001, 1188-1189頁, 1189頁。
- 16) 杉浦非水作「東洋唯一の地下鉄道上野浅草間開通」, 1927年。グラフィック・デザイナーである杉浦非水(1876-1965)に関しては例えば東京国立近代美術館編, 「杉浦非水展: 都市生活のデザイナー」, 2000年を参照。
- 17) HD, 22/23頁。
- 18) "Convergence theory"と"Modernization theory", 33頁。
- 19) Havens, Tom, "Review: History's Disquiet: Modernity, Cultural Practice, and the Question of Everyday Life, in: *The Journal of Japanese Studies*, Vol. 27, No. 2, 2001, 453-456頁, 454頁。
- 20) ここで多数の内, 挙げられるのは例えば:
- Treat, John Whittier (ed.), *Contemporary Japan and Popular Culture*, University of Hawaii Press, Honolulu, 1996.
- Martinez, D. P. (ed.), *The Worlds of Japanese Popular Culture: Gender, Shifting Boundaries and Global Cultures*, Cambridge University Press, Cambridge 1998.
- Richter, Steffi: "Entdeckung durch Verlust: Tradition—Moderne—Identität und Alltagskultur in den 1920er und 1930er Jahren", in: *Asiatische Studien / Etudes Asiatiques* LIII, 2, 1999, 177-201頁。
- Tipton, Elise K. and John, Clark (ed.), *Being Modern in Japan: Culture and Society from the 1910s to the 1930s.*, University of Hawaii Press, Honolulu 2000. 等。
- 21) 他にも例えば:
- 吉田謙吉: 考現学の誕生。筑摩書房, 東京1986年。
- 川添登: 今和次郎—その考現学。リポレポート, 東京1987年。
- 吉見俊哉: 都市のドラマトルギー: 東京・盛り場の社会史。弘文堂, 東京, 1987年。
- (英語の要約: Yoshimi, Shunya, "Urbanization and Cultural Change in Modern Japan: The Case of Tōkyō", in: Richter, Steffi & Schad-Seifert, Annette (ed.): *Cultural Studies in Japan*, Leipzig 2001 89-101頁。)
- Silverberg, Miriam, "Constructing the Japanese Ethnography of Modernity", in: *Journal of Asian Studies* Vol. 51, No. 1, 1992, 30-42頁。
- 黒石いずみ: 「建築外」の思考: 今和次郎論。ドメス出版, 東京2000年。(以下「建築外」の思考と略す。)
- 22) 今和次郎集, 全9巻, ドメス出版, 東京, 1971/

- 1972年。
- 23) 「『建築外』の思考」, 130頁。
- 24) 「『建築外』の思考」, 152頁。今とドローイングについては第二章「ドローイング教育」, 41-67頁を参照。考現学とドローイングについては第四章, 第3節の中の「フィールドワークとドローイング」, 151-152頁を参照。
- 25) 「『建築外』の思考」, 129頁。
- 26) 「『建築外』の思考」, 321頁。
- 27) 赤瀬川原平, 藤森照信, 南伸坊(編): 「路上観察学入門」, 筑摩書房, 東京, 1993年。
小林丈二的考現学-屁と富士山, カタログ, INAXギャラリー-INAX BOOKLET, 東京。